

〈研究報告〉

## 多元性に基づく自己意識尺度の作成及び信頼性と妥当性の検討

矢崎里奈 上越教育大学大学院  
高橋知音 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：自己意識，尺度開発，青年，アイデンティティ

### 1. 問題と目的

#### 1.1 現代青年とアイデンティティ

青年期は、「自分とは何者か」といったアイデンティティを模索する時期である。アイデンティティとは自分自身の斉一性と時間の流れの中での連続性の自覚と、自分の斉一性と連続性を他者が認めてくれているという自覚を意味する (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011)。このような自己斉一性や連続性を模索している期間を心理・社会的モラトリアムと捉えることができ、青年はこの期間に自由な役割実験を通して、社会のある特定の場所に「あらかじめ明確に定められた、しかもその人にとっては自分のために作られた様な場所」である適所を見つけ、それによって、内的連続性と社会的斉一性の感覚を獲得していく (Erikson, 1959 西平・中島訳 2011)。しかし、現代社会は Erikson がアイデンティティ論を提唱した時代から大きく変化している。近年は青年が関わりを持つ場や役割が増えており、自己を統合する作業はより難しくなっていると考えられる。そのような状況で、近年の論文では青年の自己の状態の多元化が多く指摘されている。

辻 (1999) は、つきあいの範囲をけじめづけるような限定的な対人関係が好まれるようになってきたとし、このような「複数の自分のどれもが本当の自分であるというような」複数のアイデンティティを持つ在り方を多元的アイデンティティという新たな在り方として自我構造のモデルを作成している (図 1)。図 1 の (a), (b) のそれぞれの円の中心は「心の深いところ」や「本音」を表しており、線のつながりが他者との関係の在り方を示している。(a) のような一貫した自我構造であれば、中心での付き合いは「本当の自分」を出した親密な対人関係、中心から離れている部分的な付き合いは、中心の「本当の自分」を隠した表層的で希薄な対人関係を意味する。(b) のような、複数の中心を持つ複数の円がゆるやかに束ねられた多元的な自我構造であれば、部分的な関係でも表層的ではないことを意味する。

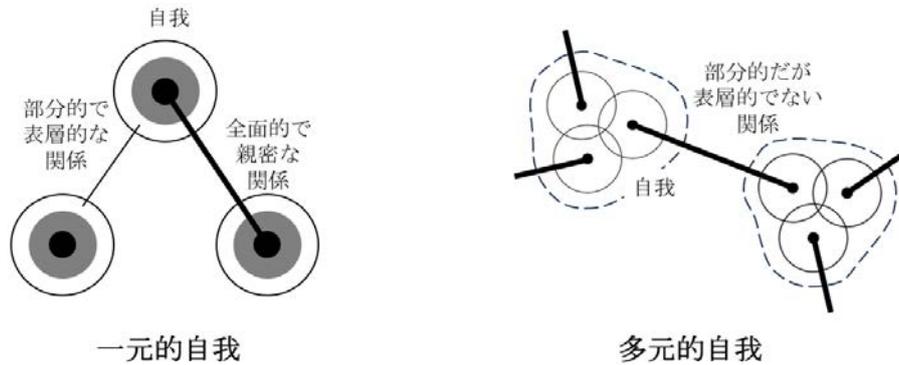


図1 自我構造の2つの模式図 (辻, 1999)

### 1.2 多面的な自己を持つ青年のアイデンティティ形成

近年、青年の自己の多元化やアイデンティティ形成における変化について様々な研究が行われている。岩田 (2006) では、自己に関わる質問の因子分析により、自己複数性因子、自己拡散因子、そして自己一貫志向因子に分けられることから、自己の〈同一性-拡散〉軸とは別に、自己の多元性に関わる軸が存在していることを示唆した。また、岩田 (2006) は自己の多元性に着目した自己意識の類型化を行った。まず、「場面によってでてくる自分というものとは違う」という「状況性」によって、「多元的自己」と「自己一元型」に分けている。その上で、多元的自己を「意識して自己を使い分けている」という自己の使い分けの「戦略性」によって、「戦略的自己」と「非戦略的自己」に分類している。さらに、「自分の中には、うわべだけの演技をしているような部分がある」というような、多元化した自己の「仮面性」によって戦略的自己を「仮面使い分け型」と「素顔使い分け型」に、非戦略的自己を「仮面複数化型」と「素顔複数化型」にそれぞれ分類している。上記の自己意識類型と「自己拡散因子」との関連を調査したところ、自己一元型で最も自己拡散の意識が低く、仮面使い分け型で最も高くなっていたが、多元的自己でも「仮面性」の有無によって大きな違いが見られ、「仮面性」を認めると自己拡散の意識が高いとした。また、「素顔複数化型」は一元的自己にかなり近い傾向を示しているとした。そして、多元的自己の類型間での違いに着目したところ、「自分らしさ」と「自己肯定感」は自己拡散の意識と同様に「仮面性」を認めると感覚が低くなっているが、「なりたい自分になるために努力することが大切」では、「仮面性」との関係は明確ではなく、どちらかといえば「戦略性」と関係していることを示した。

木谷・岡本 (2018) では、近年の青年の特徴を「多面的でありつつも、精神的健康を保っている青年」とし、青年の自己意識の類型化を岩田 (2006) において使用された自己意識尺度における自己複数性因子と尾関 (1993) の改訂版大学生用ストレス自己評価尺度の抑うつ情動的尺度を用いたクラスター分析によって行った。その結果、自己複数性得点と抑うつ得点の両方が高い群である自己拡散群、自己複数性が高く抑うつ得点が低い多元的自己群、自己複数性が低く抑うつ得点も低い一元的自己群の3つの類型を見出した。また、

## 多元性に基づく自己意識尺度の作成

それぞれの類型においてアイデンティティ感覚の特徴を比較したところ、自分と社会との適応的な結びつきの感覚とされている「心理社会的同一性」の得点は、多元的自己群は一元的自己群と自己拡散群との間に位置するものの、多元的自己群と一元的自己群との間に有意な差はないということが示された。

藤野（2022）では、自己の多元性を「状況に応じて複数の異なる自己を振る舞い分ける自己の在り方」と定義した。その上で、自己多元性を「状況性」「戦略性」「仮面性」の観点から測定する尺度を作成し、それによる青年の類型化と特徴の検討を行っている。作成された尺度は自己不変、意識的自己切替、無意識的自己切替の3因子構造となった。また、青年の類型化を、作成された自己多元性測定尺度と伊藤・小玉（2005）の本来感尺度を用いたクラスター分析で行った。その結果、状況に応じて自己を意識的に切り替えながらもそのような自分変わらない自分の感覚を抱いている「多元本来群」、意識的に自己を振る舞い分けながらもそれらを偽りの自分のように感じている「多元仮面群」、場面によって自己が変化することなく一貫した自己を持っている「一元的自己群」、状況によって自己が多数に変化し、それらに自分らしさを感じられず一貫していない「多元的自己群」の4つの類型を見出した。また、それぞれの類型についてアイデンティティ感覚の差を検討したところ、多元的自己群が多次元自我同一性尺度（MEIS）総得点及び全ての下位尺度において最も低く、自己一元群が最も高かったことを示した。一方で、多元本来群と多元仮面群の間にはアイデンティティの感覚において有意な差はみられないことが示された。

### 1.3 目的

このように、先行研究において多元化した青年のアイデンティティ形成に関する研究が多く行われている。しかし、青年の自己意識の類型化は研究によって様々であり、明確な方法は定められていない。岩田（2006）で使用されていた自己意識尺度は、信頼性や妥当性が検討されていない。木谷・岡本（2018）では、岩田の自己意識尺度の自己複数性因子3項目が用いられているが、同じように信頼性や妥当性が検討されていない。藤野（2022）では、多元的アイデンティティの「戦略性」や「仮面性」を検討しているため、4つの類型となっている。また、自己多元性測定尺度と本来感尺度（伊藤・小玉，2005）を用いたクラスター分析を行うことによって青年の自己意識の分類を行っているため、個人が各分類にどの程度当てはまるのかを知ることはできない。よって本研究では、個人の自己意識がどの分類に最もあてはまるか、また、分類の中での強さがどの程度であるかを測ることのできる尺度の作成を目的とする。次に、各因子のアイデンティティ感覚の特徴を検討する。

尺度作成において、先行研究（岩田，2006；木谷・岡本，2018；藤野，2022）をもとに、「自己一元性」と「自己多元性」、「自己拡散」の観点を有した自己意識を測定する多元性に基づく自己意識尺度を作成し、信頼性及び妥当性の検討を行う。また、自己多元性の観点においては、藤野（2022）において検討されていた「仮面性」と「戦略性」の観点を踏まえて作成する。作成した多元性に基づく自己意識尺度の妥当性は、因子分析を行い、下位尺度が「自己一元性」、「自己多元性」、「自己拡散」の3因子に分かれるかどうかを

検討する。それとともに、自己多元性測定尺度（藤野，2022）と本来感尺度（伊藤・小玉，2005）を用いて妥当性の検討を行う。自己多元性測定尺度と本来感尺度を用いてクラスター分析し、藤野の類型が再現されるか確認する。4つの類型が再現されれば、多元本来群と多元仮面群が「自己多元性」と、一元的自己群が「自己一元性」と、多元的自己群が「自己拡散」と関連が見られると考えられる。各因子を元に作成した下位尺度によって測定されるアイデンティティ感覚については、「自己一元性」と「自己多元性」が多次元自我同一性尺度（谷，2001）の総得点及び全ての下位尺度との正の相関が、「自己拡散」は負の相関がみられると考えられる。また、下位尺度においては、自己の不変性および時間的連続性についての感覚である「自己斉一性・同一性」、他者からみられているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚である「対他的同一性」において、「自己多元性」との負の関連がみられると考えられる。

## 2. 方法

### 2.1 質問紙

#### (1) 多元性に基づく自己意識尺度の作成

先行研究（岩田，2006；木谷・岡本，2018；藤野，2022）を参考に、「自己一元性」，「自己多元性」，「自己拡散」の観点を有する計24項目の多元性に基づく自己意識尺度を作成した。

#### (2) 質問紙の構成

質問紙の構成は以下に示す項目からなり、合計65項目であった。

##### ①フェイスシート項目

フェイスシート項目として、性別、年齢の回答を求めた。

##### ②多元性に基づく自己意識尺度

前述の通り作成した多元性に基づく自己意識尺度24項目を使用した。「あなた自身についてお聞きします。以下の項目について最も近いと思うものを1～7の中から1つ選んでください」と教示し、「全くあてはまらない」1点、「ほとんどあてはまらない」2点、「どちらかというにあてはまらない」3点、「どちらともいえない」4点、「どちらかというにあてはまる」5点、「かなりあてはまる」6点、「非常にあてはまる」7点の7件法で回答を求めた。

##### ③多次元自我同一性尺度（MEIS）（谷，2001）

谷（2001）が作成した多次元自我同一性尺度（MEIS）を用いた。「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つの下位尺度から、アイデンティティ感覚を測定する。項目数は各下位尺度5項目ずつの20項目からなる。「あなた自身についてお聞きします。以下の項目について最も近いと思うものを1～7の中から1つ選んでください」と教示し、「全くあてはまらない」1点、「ほとんどあてはまらない」2点、「どちらかというにあてはまらない」3点、「どちらともいえない」4点、「どちらかとい

## 多元性に基づく自己意識尺度の作成

うとあてはまる」5点、「かなりあてはまる」6点、「非常にあてはまる」7点の7件法で回答を求めた。

### ④自己多元性測定尺度（藤野，2022）

藤野（2022）が作成した自己多元性測定尺度を用いた。「意識的自己切替」「無意識的自己切替」「自己不変」の3つの下位尺度から、自己の多元性を測定する。項目数は各下位尺度4項目ずつ計12項目からなる。「あなた自身についてお聞きします。以下の項目について最も近いと思うものを1～5の中から1つ選んでください」と教示し、「あてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらでもない」3点、「まあまああてはまる」4点、「あてはまる」5点の5件法で回答を求めた。

### ⑤本来感尺度（伊藤・小玉，2005）

伊藤・小玉（2005）が作成した、自分が「本当の自分」であるという感覚を測定する本来感尺度を用いた。項目数は7項目からなる。「あなた自身についてお聞きします。以下の項目について最も近いと思うものを1～5の中から1つ選んでください」と教示し、「あまりあてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらでもない」3点、「まあまああてはまる」4点、「あてはまる」5点の5件法で回答を求めた。先行研究（藤野，2022）において、仮面性を測定するためにそれぞれの得点を逆転項目化しているため、本研究においてもそれぞれの得点を変換して集計した。

## 2.2 手続き

大学生を対象とし、大学の授業が終了した後に、受講している学生に質問紙への回答依頼を行い、Googleフォームから質問紙への回答を求めた。また、SNSを通して知り合いに回答依頼を行った。その際に、口頭や文章によって、調査への協力が強制ではないこと、途中で回答をやめなくなった場合は回答をやめられること、得られたデータは統計的に処理され、個人が特定されることはないことを説明した。

## 2.3 調査対象者

大学生を対象に調査を行い、151件の回答を得た。年齢を無回答とした1名を除いた150名（男性56名、女性93名、回答しない1名）を分析対象とした。平均年齢は20.4歳（ $SD = 1.2$ ）であった。

## 3. 結果

### 3.1 多元性に基づく自己意識尺度の尺度構成

#### (1) 多元性に基づく自己意識尺度の因子分析

多元性に基づく自己意識尺度の候補として作成した24項目に対して因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。その結果、固有値が順に6.28, 2.82, 1.83, 1.37, 1.20と減衰しており、固有値の推移と解釈可能性から3因子構造が妥当であると判断した。その後、因子負荷量が相対的に低かった2項目を削除し、3因子22項目からなる多元性に基づく自己意識尺度を構成した（表1）。項目13の負荷量は若干低いですが、下位尺度の解釈可能性の点から、この項目も採用することとした。第1因子は「状況によって『自分』というも

のは変わる。」や「意識して『自分』を使い分けている。」のように、意図的な自己使い分けの項目が多く、「周りに合わせて『自分』を変化させるが、全て本当の自分である。」のように、自己の使い分けを受け入れる面が見えたため、「自己多元性」因子と命名した。項目7の「相手や集団によって『自分』が変わることはない。」は、自己の一貫性を想定した項目であったが、因子負荷量が負の方向で高かったため、反転項目として採用した。第2因子は『『自分』が変化することで疲れが生じる。』や「コミュニケーションの中で『自分はこうではないのに』と感ずることがある。」など、自己の使い分けを行っていて、その中での不全感を持つ項目が集まったため、「自己不全」因子と命名した。項目19の「どんな場面においても素の自分でいられる。」は、項目7と同様の理由で反転項目として採用した。第3因子は、「自分には自分らしさがある。」や「一貫した『自分』がある。」などの、自己の一貫性を示す項目が集まったため、「自己一元性」因子と命名した。項目3、項目6、項目18、項目23については、自己不全感を想定した項目であったが、因子負荷量が負の方向で高く、解釈も一致するため、反転項目として採用した。

表1 多元性に基づく自己意識尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

項目	F1	F2	F3	共通性
8. 状況によって「自分」というものは変わる。	<b>.88</b>	-.14	-.08	.68
2. 話す人、コミュニティによって「自分」は変わる。	<b>.80</b>	-.05	-.11	.63
14. 場面に応じて「自分」の表出する側面を変えている。	<b>.71</b>	.25	.23	.71
7. 相手や集団によって「自分」が変わることはない。*	<b>.62</b>	-.08	-.14	.39
9. 同じ場面内でも、その時々において「自分」は変わる。	<b>.61</b>	-.06	-.15	.38
5. 意識して「自分」を使い分けている。	<b>.45</b>	.15	.12	.28
22. 周りに合わせて「自分」を変化させるが、全て本当の自分である。	<b>.43</b>	-.24	.08	.14
11. その場で求められている「自分」として振る舞う。	<b>.40</b>	.31	-.06	.41
15. 「自分」が変化することで疲れが生じる。	-.31	<b>.68</b>	-.06	.35
20. 自分には演技をしているようなうわべだけの部分がある。	.07	<b>.66</b>	-.04	.50
21. 他の人から見た自分と本来の自分とは異なる。	-.06	<b>.54</b>	-.03	.27
19. どんな場面においても素の自分でいられる。*	.06	<b>.53</b>	-.03	.33
12. コミュニケーションの中で「自分はこうではないのに」と感ずることがある。	.09	<b>.52</b>	-.08	.37
10. 話す人やコミュニティの親密さによって「自分」を出すかどうか判断する。	.37	<b>.45</b>	.26	.47
24. その場や状況にふさわしい「キャラ」を振る舞う。	.32	<b>.37</b>	.01	.37
3. 自分がどんな人であるか分からなくなることがよくある。*	-.21	-.10	<b>.67</b>	.63
6. 本当の自分が分からない。*	-.06	-.17	<b>.66</b>	.56
4. 自分には自分らしさがある。	.12	-.07	<b>.55</b>	.32
18. 自分のやりたいことがはっきりしない。*	-.30	.02	<b>.54</b>	.43
1. 一貫した「自分」がある。	-.05	.17	<b>.48</b>	.20
23. 「自分」が場面によって変わることに違和感がある。*	.33	-.31	<b>.43</b>	.32
13. 分かってくれる人が「自分」を理解してくれればそれでいい。	.27	.14	<b>.33</b>	.18
因子寄与	4.95	4.25	2.81	
因子間相関 F2	.55			
F3	-.19	-.34		

\*は反転項目を指す。

### 3.2 尺度の構成と信頼性の検討

各因子に高い負荷量を示した項目から、3つの下位尺度を構成した。各下位尺度について、信頼性を検討するために、クロンバックの $\alpha$ を算出した。自己多元性では $\alpha = .824$ 、自己不全では $\alpha = .773$ 、自己一元性では $\alpha = .738$ と概ね高い値を示した。下位尺度の $\alpha$ 係数

と記述統計量を表 2 に示す。

表 2 下位尺度の  $\alpha$  係数と記述統計 ( $N = 150$ )

	$\alpha$	平均値	$SD$	最小値	最大値
自己多元性(8項目)	.82	40.9	8.0	9.0	56.0
自己拡散(7項目)	.77	33.4	7.2	7.0	47.0
自己一元性(7項目)	.74	31.6	7.0	10.0	49.0

### 3.3 併存的妥当性の検討

先行研究（藤野，2022）において，自己多元性測定尺度と本来感尺度のクラスター分析による青年の自己意識の分類を行っている。藤野（2022）は自己意識を4分類しているが，自己多元性に着目し，多元群を本来性と仮面性で分けているためである。そのため，併存的妥当性の検討として，自己多元性測定尺度と本来感尺度の得点を用いてクラスター分析を行い，多元性に基づく自己意識尺度との関連を検討した。まず，自己多元性尺度の3つの下位尺度得点と，「仮面性」を測るために本来感尺度を逆転項目化した得点を用いてクラスター分析を行った。先行研究と同じ4クラスターを採用した（図2）。クラスターを独立変数とし，意識的自己切替，無意識的自己切替，自己不変，仮面性を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果，どの変数も主効果が有意であった（意識的自己切替： $F(3, 146) = 34.24, \eta^2 = .41, p < .001$ ；無意識的自己切替： $F(3, 146) = 75.92, \eta^2 = .61, p < .001$ ；自己不変： $F(3, 146) = 72.60, \eta^2 = .60, p < .001$ ；仮面性： $F(3, 146) = 51.20, \eta^2 = .51, p < .001$ ）。多重比較（Holm法）の結果，意識的自己切替では，クラスター4<クラスター1<クラスター2<クラスター3の順で高かった（ $p < .001$ ）。無意識的自己切替では，クラスター4<クラスター1<クラスター3<クラスター2の順で高かった（クラスター1とクラスター3，クラスター3とクラスター2の間は $p < .01$ ，他は $p < .001$ ）。自己不変では，クラスター3<クラスター2<クラスター1<クラスター4の順で高かった（ $p < .001$ ）。仮面性では，クラスター1<クラスター2<クラスター4<クラスター3（クラスター1<クラスター4）の順で高かった（クラスター1とクラスター4の間は $p < .01$ ，他は $p < .001$ ）。それぞれの平均値を表3に示した。

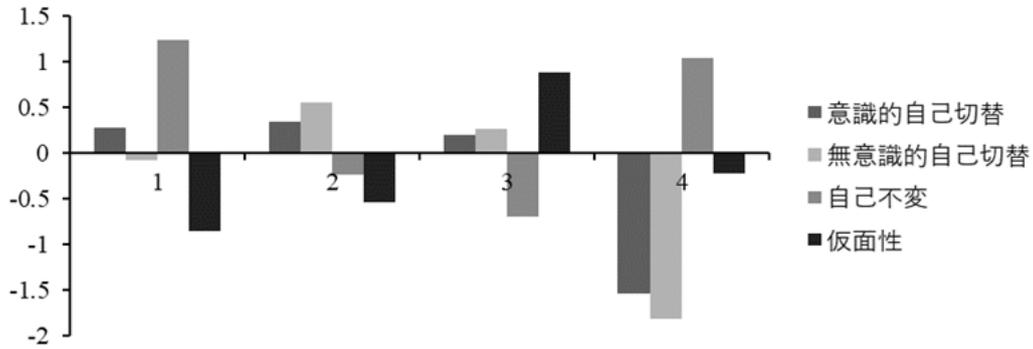


図2 各クラスターの自己多元性得点, 仮面性得点 (標準化得点)

表3 各クラスターの自己多元性得点と仮面性得点

	1. 多元本来群	2. 多元使い分け群	3. 多元的自己群	4. 一元的自己群	df	F
意識的自己切替	3.99 (0.63)	4.04 (0.61)	3.93 (0.62)	2.49 (0.77)	3, 146	34.24 4 < 1,2,3
無意識的自己切替	3.92 (0.47)	4.43 (0.45)	4.20 (0.42)	2.53 (0.80)		75.92 4 < 1 < 3 < 2
自己不変	3.45 (0.53)	2.22 (0.39)	1.85 (0.46)	3.28 (0.87)		72.60 3 < 2 < 1,4
仮面性	2.28 (0.55)	2.52 (0.42)	3.61 (0.42)	2.77 (0.93)		51.20 1,2,4 < 3 1 < 4

()内は標準偏差を指す。

クラスター分析の結果は、クラスター1 (多元本来群) , クラスター3 (多元的自己群) , クラスター4 (一元的自己群) は、先行研究 (藤野, 2022) と似た形となったが、クラスター2のみ違う形となった。先行研究ではあった多元仮面群の特徴が見られるクラスターが見当たらなかった。クラスター2は意識的自己切替や無意識的自己切替が高い一方で、自己不変や仮面性が低い群であり、意識的・無意識的に自己を振る舞い分け、自己の変化を感じながらも、それを本来の自分として感じていることが窺われるため、岩田 (2006) の「素顔使い分け型」に分類できると考えた。そのため、今回は「多元使い分け群」と命名して分析を進めた。多元本来群は23名、多元使い分け群は48名、多元的自己群は57名、一元的自己群は22名であった。

次に、多元性による青年の類型と多元性に基づく自己意識尺度との関連を見るために、クラスター (自己意識の類型) を独立変数とし、多元性に基づく自己意識尺度の下位尺度を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果、どの変数も主効果が有意であった (自己多元性 :  $F(3, 146) = 23.54, \eta^2 = .33, p < .001$  ; 自己不全 :  $F(3, 146) = 16.84, \eta^2 = .26, p < .001$  ; 自己一元性 :  $F(3, 146) = 18.57, \eta^2 = .28, p < .001$ ) 。多重比較 (Holm 法) の結果、自己多元性では、クラスター4 (一元的自己) < クラスター1 (多元本来) ・クラスター2 (多元使い分け) ・クラスター3 (多元的自己) の順で高かった ( $p < .001$ ) 。自己不全では、クラスター4 (一元的自己) < クラスター1 (多元本来) ・ク

## 多元性に基づく自己意識尺度の作成

クラスター2（多元使い分け）＜クラスター3（多元的自己）の順で高かった（クラスター1の間とクラスター3の間は $p = .016$ ，クラスター2の間とクラスター3の間は $p = .002$ ，他は $p < .001$ ）。自己一元性では，クラスター3（多元的自己）＜クラスター1（多元本来）・クラスター2（多元使い分け）・クラスター4（一元的自己）の順で高かった（ $p < .001$ ）。それぞれの平均値を表4に示した。自己多元性尺度では，多元的な面を持つ3つのクラスターが有意に高くなった。また，自己不全尺度では自己拡散の状態であるとされている多元的自己群が有意に高くなり，自己一元性尺度では，多元的自己群が有意に低くなった。それぞれの平均値を表4に示した。

表4 各クラスターの多元性に基づく自己意識尺度得点

	1. 多元本来群	2. 多元使い分け群	3. 多元的自己群	4. 一元的自己群	<i>df</i>	<i>F</i>	
自己多元性	5.03 (0.99)	5.49 (0.80)	5.34 (0.59)	3.80 (1.15)		23.54	4 < 1,2,3
自己不全	4.72 (1.08)	4.71 (1.03)	5.26 (0.62)	3.66 (1.01)	3, 146	57.16	4 < 1,2 < 3
自己一元性	4.85 (1.12)	4.89 (0.66)	3.85 (0.66)	5.04 (1.02)		61.07	3 < 1,2,4

()内は標準偏差を指す。

### 3.4 多元性に基づく自己意識尺度とアイデンティティ得点の比較

多元性に基づく自己意識尺度の各下位尺度のアイデンティティ感覚の特徴を検討するために，多元性に基づく自己意識尺度の下位尺度得点と MEIS 得点の相関係数を算出した（表5）。相関係数は，自己多元性で $r = -.22$ （ $p = .006$ ），自己不全で $r = -.55$ （ $p < .001$ ），自己一元性で $r = .48$ （ $p < .001$ ）であり，自己不全で負の相関，自己一元性で正の相関が見られた。また，MEISの下位尺度得点との相関係数を算出したところ，自己不全では，自己斉一性・連続性で $r = -.49$ （ $p < .001$ ），対他的同一性で $r = -.59$ （ $p < .001$ ），心理社会的同一性で $r = -.50$ （ $p < .001$ ）であり，負の相関が見られた。自己一元性では，対自的同一性で $r = .63$ （ $p < .001$ ）であり，正の相関が見られた。

また，多元性に基づく自己意識尺度の自己多元性尺度得点と自己不全尺度得点をそれぞれ平均点で高群と低群に分け，それぞれの組み合わせと MEIS 総得点との関連を見るために一要因分散分析を行った。その結果，主効果が有意であった（ $F(3, 146) = 9.50$ ， $\eta^2 = .16$ ， $p < .001$ ）。多重比較の結果，自己多元性高・自己不全高群，自己多元性低・自己不全高群＜自己多元性低・自己不全低群，自己多元性高・自己不全低群の順で高かった（自己多元性低・自己不全高群と自己多元性高・自己不全低群の間は $p = .002$ ，自己多元性低・自己不全高群と自己多元性高・自己不全低群の間は $p = .003$ ，他は $p < .001$ ）。

表5 多元性に基づく自己意識尺度と MEIS の相関

	自己多元性	自己不全	自己一元性
MEIS総得点	-.222 **	-.551 **	.484 **
自己斉一性・連続性	-.147	-.487 **	.379 **
対自的同一性	-.283 **	-.371 **	.626 **
対他的同一性	-.194 *	-.587 **	.346 **
心理社会的同一性	-.169 *	-.500 **	.371 **

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

表6 自己多元性得点・自己不全得点と MEIS 得点

	1. 自己多元性高 自己不全高	2. 自己多元性高 自己不全低	3. 自己多元性低 自己不全高	4. 自己多元性低 自己不全低	$df$	$F$
MEIS総得点	110.71 (19.13)	128.41 (18.42)	111.87 (16.73)	126.70 (19.18)	3, 146	9.49 1,3 < 2,4

#### 4. 考察

##### 4.1 多元性に基づく自己意識尺度の因子分析結果

因子分析の結果から、青年の自己意識は「自己多元性」、「自己不全」、「自己一元性」に分類することができることが示唆された。また、項目の分類は想定とは異なるものとなり、自己多元性因子に高い負荷量を示した項目は8項目、自己不全因子は7項目、自己一元性因子は7項目となった。自己一元性を想定していた項目7の「相手や集団によって「自分」が変わることはない。」と項目19の「どんな場面においても素の自分でいられる。」を、反転項目としてそれぞれ自己多元性尺度、自己不全尺度で採用した。負の関連の出た原因として自己の変化のしにくさよりも、変化のしやすさを基準にして考える人が多かったためであると考えられる。

削除した2項目について、項目16の「親しい人には『自分』の全てを見せている。」は、親しさの程度によって自己表出を選択し、親しい人とは全面的な、親しくない人とは部分的な関わりとするかどうかを尋ね、得点が高い場合は自己一元性因子に高い負荷量を示すと予測を立てていた。しかし、「全て」を見せるという表現をしたが、親しい人にも自分の全てを見せることには抵抗があるために、想定していた解釈をされず、他の項目との関連がみられなかったと考えられる。また、項目17の「遊びの内容によって一緒に遊ぶ友だちを使い分けている。」は、集団やコミュニティによって自己を使い分けるため、遊びの場面に応じてそれに適している友人の選択を行うかどうかを尋ね、得点が高い場合は自己多元性因子に高い負荷量を示すと予測を立てていた。しかし、友だちに対して「使い分ける」という言葉を用いてしまったことや、調査協力者に教育学部生が多かったことから、想定とは違う解釈になってしまったと考えられる。

### 4.2 多元性に基づく自己意識尺度の信頼性

信頼性については、 $\alpha$ 係数は自己多元性尺度において.80を上回っており、自己不全尺度や自己一元性尺度についても.70を上回る概ね高い値となった。このことから、内的整合性の観点における信頼性は十分であるといえるであろう。

### 4.3 多元性に基づく自己意識尺度の妥当性

藤野（2022）の自己多元性測定尺度と伊藤・小玉（2005）の本来感尺度との関連を検討し、併存的妥当性の根拠を得ることができたと考えられる。

自己多元性測定尺度と本来感尺度のクラスター分析は、先行研究（藤野，2022）とは異なる結果となった。多元本来群、一元的自己群、多元的自己群の特徴に当てはまるクラスターはみられたものの、多元的仮面群の特徴と一致するクラスターはみられなかった。このような結果となった理由として、回答者に教育学部生が多かったことが挙げられる。益子（2010）において、内省傾向が本来感と弱い正の関連を示すことが明らかになっている。教育学部では内省の意義を学んだり、授業の中でリフレクションを行ったりする機会が多いため、多元的であっても本来感が高く、仮面性が低くなる人が多くなったと考えられる。

また、クラスターごとの多元性に基づく自己意識尺度得点については、自己不全尺度においては、多元的であり自己拡散の状態であるとされる多元的自己群が有意に高くなったが、自己多元性尺度と自己一元性尺度では、それぞれ、多元本来群・多元使い分け群と多元的自己群、多元本来群・多元使い分け群と一元的自己群の間に有意差は見られなかった。自己多元性尺度で有意差が見られなかった原因として、自己拡散の状態においても、多元性を有しているためであると考えられる。自己一元性尺度で有意差が見られなかった原因として、仮面性の低さが挙げられる。岩田（2006）において、仮面性の低い者は一元的自己とかなり近いアイデンティティ感覚を有していることが示されている。今回のクラスター分析において、多元本来群と多元使い分け群では仮面性が低くなったために、一元的自己との有意差が出なかったと考えられる。

これらの結果から、自己多元性尺度得点が高い状態は多元性を持ちながらそれに対する違和感が少ない状態、自己不全尺度が高い状態は多元性をもち、その状態に違和感がある状態、自己一元性尺度が高い状態は一貫した自己を持つ状態であると考えられる。そのため、多元性に基づく自己意識尺度の妥当性に関して、ある程度の根拠が得られたといえるだろう。

### 4.4 多元性に基づく自己意識尺度とアイデンティティ感覚

多元性に基づく自己意識尺度の下位尺度と MEIS の得点の関連を検討したところ、自己不全尺度と MEIS 総得点で負の相関が、自己一元性尺度と MEIS 総得点で正の相関が見られた。このことから、自己不全尺度はアイデンティティ拡散の程度、自己一元性尺度はアイデンティティ達成の程度を表すと思われる。また、自己多元性尺度は弱い負の相関が見られたため、自己多元性尺度得点が高いことが、多元的アイデンティティ達成の状態であるとは言えないことが示された。また、MEIS 下位尺度との関連として、自己不全では対自

的同一性のみ弱い負の相関となり、他は中程度の負の相関が見られた。また、自己一元性では対自的同一性のみ中程度の正の相関が見られた。この原因として、先述した本来感の高さが上げられる。内省傾向の強さが自己意識の明確さの感覚である対自的同一性の得点の高さにつながっていると考えられる。

自己多元性尺度得点と自己不全尺度得点を平均値で高群と低群に分け、それぞれの組み合わせと MEIS 総得点の関係を見たところ、自己多元性低・自己不全低群と自己多元性高・自己多元性低群が有意に高くなった。自己多元性が低く、自己不全も低い状態は、意図的な自己の使い分けをあまりしておらず、自己に対する不全感も低い状態であるため、一元的なアイデンティティを確立している状態であると考えられる。また、自己多元性が高く、自己不全が低い状態は、意図的な自己の使い分けをしており、そのような自分に対して違和感を抱いていない状態であるため、多元的アイデンティティを確立している状態であると考えられる。

#### 4.5 本研究の意義

以上のように、本研究においては、青年の自己意識の多元性、一元性、自己不全の程度を測ることのできる尺度を作成することができた。従来は、クラスター分析することによって青年の自己意識を分類していたため、知ることができたのは自分がどの群にあてはまるかのみであった。しかし、多元性に基づく自己意識尺度によって、個人の多元性や一元性、自己不全の程度を個人内で比較することができるため、自己の意識へのより深い理解につなげることができると考えられる。また、意識の程度による特性の違いについても検討することができるようになると考えられる。

#### 4.6 本研究の限界と今後の課題

本研究では、自己意識の特徴やそれぞれの程度を測ることのできる尺度である多元性に基づく自己意識尺度を作成することはできた。しかし、自己多元性の面において、仮面性の観点からの捉えがあまりできていないため、自己多元性における仮面性を踏まえて検討する必要があると考えられる。そのために、教育学部に偏ることなく、より幅広い人を対象として検討することが課題である。また、自己意識の測定によるアイデンティティの状態の理解につなげることができなかつたため、自己多元性と自己不全をより明確に分けるための、それぞれの状態像を捉えていく必要があると考えられる。

#### 引用文献

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W. Norton. (エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵(訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠信書房)
- 藤野 遼平 (2022). 現代青年における自己の多元性の分類とアイデンティティの関連 青年心理学研究, 33, 87-104.
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.

## 多元性に基づく自己意識尺度の作成

- 岩田 考 (2006). 若者のアイデンティティはどう変わったか 浅野智彦 (編) 検証・若者の変貌—失われた10年の後に— (pp. 151-190) 勁草書房
- 木谷 智子・岡本 祐子 (2018). 自己の多元性とアイデンティティの関連—多元的アイデンティティに注目して— 青年心理学研究, 29, 91-105.
- 益子 洋人 (2010). 大学生の過剰な外的適応行動と内省傾向が本来感におよぼす影響 学校メンタルヘルス, 13, 19-26.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度(MEIS)の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 辻 大介 (1999). 若者と対人関係の「フリッパー」志向 橋元良明・船津衛(編) 子ども・青少年とコミュニケーション (pp. 21-25) 北樹出版

(2023年11月30日 受付)

(2024年 2月29日 受理)